

株式会社シ・ピ・エル

自らを「空間創造屋」と称す株式会社シ・ピ・エル(白山市)は2017(平成29)年5月に設立70周年を迎える。戦後の混乱期に、看板製作をベースにしながらもディスプレイ分野にいち早く取り組んだ会社は、豊かな創造力によって時代が求めるものを的確に捉え、成長を続けていった。これからも「人の喜ぶ空間づくり」を第一に、次の100年に向かっていく。

シ・ピ・エルの社名はCulture(カルチャー)・Publicity(パブリシティ)・Laboratory(ラボラトリー)＝文化宣伝研究所の、頭文字を取っており、1947(昭和22)年に上島大三氏が「啓蒙的博覧会の企画製作」を業務として、金沢市堅町で設立したのが初めである。

万博から波に乗る

その後、高度経済成長に伴い大型化する展示会やディスプレイ業に積極的に関わりながら社業を進

展させていった。折しも1970(昭和45)年に大阪万博が開催され、日本のディスプレイ・イベント業界が活気付いた時代でもあった。石川県でも1973(昭和48)年に、日本海博が開催されたり、デパートの再開発があるなどして、大型プロジェクトに関わる機会が増え、現在に至る「基礎体力」を養うことができたのである。

現在の理念である「私たちは豊かな創造力によって新しい価値を見だし地域・社会に貢献する」は、「人の喜び」を経営の原点と

時代のニーズ捉え70年 「人が喜ぶ空間」を提案

株式会社シ・ピ・エル
イベントの企画・演出、会場のデザイン、屋内外広告製作などを行う。設立は1947(昭和22)年5月30日。本社北陸本部は白山市村井町1-675番地5。東京本部は東京都港区浜松町2-15-4。資本金5000万円。

する当時の考えを基本としている。そして、その考えに共感を覚え、1964(昭和39)年に19歳で入社したのが、現在の小作拓史会長である。

ヘルスセンターに感動

小松に生まれた小作会長は中学1年の時、金沢に移り住み、家から見える卯辰山のヘルスセンターにあこがれた。はじめてヘルスセンターに連れて行ってもらった時は、「こんな楽しい所があるのか」とカルチャーショックを感じたそう。その対価としてお金がもらえる仕事に魅力を感じたという。小作会長にとって、その時、心に残った楽しい思い出がすべてだった。このため、入社後の小作会長は、「テーマパーク」に、どっぷりはまり、県内や福井県はもとより、

関西のデパート屋上遊園地なども次々と手掛けていった。看板、装飾から徐々に社の業態が変化していった時代である。

社の業態が変化していったことは、決して会社からのトップダウンではなかった。小作会長の後を継いだ林美成(嘉成)社長は「うちの会社は、自分がやりたい、と思っただけでやっていくと、それが会社の業務になっていく」と話す。会社が指示をするのではなく、社員が自ら提案、実践する風土がシ・ピ・エルの強みなのである。

小作会長のようにテーマパークに力を入れる者がいるとすれば、一方で、博物館や資料館に魅力を感じて、自ら仕事を取ってくる社員がいる。これらが成果として実ると、それが会社の業務として定着するというのが、

林社長はというと、以前はハードが中心だったイベント関係で、先々は企画・運営・進行などへの取り組みが重要だと感じ、上司から「叱られながら」も、ソフトの充実に力を注いでいった。その結果、現在の総合的な会社が出来



社員から示された企画案にアドバイスする小作会長(左から2人目)と林社長(左端)＝白山市村井町

社員自らが考え、実践

のである。

サラリーマンがない

また、小作会長は、「うちの会社には、サラリーマンがない」とも言う。みんなが自主的に動き、好きな分野を自分で見いだして、自ら営業して、ビジネスにつなげてきたという歴史がある。この風土の中で育った林社長も、現在、新しい分野に向けた人材育成など

企画、つまりソフトだけの業務も増えてきているという。「製作会社」から「制作会社」の面が強くなってきたそうで、林社長も、これからはソフトで勝負する時代、と捉えている。

林社長によると、業界の中で、会社の強みを出すのであれば、「どこまでしっかり手を掛けて物事を考えるか」であるという。例えば、予算内でやってほしいという要望

**脱皮しないと
生きられない**

に取り組んでおり、会社に変化をもたらす結果を生み出している。若い人の感性が生かされるように会社も変わっていかねければならず、これを小作会長は「蛇と一緒で、脱皮しないと会社は生きられない」と言い表した。

「製作」から「制作」へ

イベント、展示会の運営、展示内装などの業務のほかに、最近

が分かっている。「何とかここまでやれないか」とこだわる姿勢は忘れない。顧客に対しても、「勝負」という考えではなく、「パートナー」として仕事に当たるようにしている。そのため、時にはキツイことも指摘するし、「同じ金額を使うなら、こうしよう」というような提案もするが、この手間が勝負の分かれ目となるのである。最近、パートナーと言ってもら

え、きたんなく話せる顧客が増えてきたという。協力業者も、下請けではなくてパートナーだと位置付けており、一つの仕事が片付くと、「ご苦労さん」と言って終わ

るのではなく、「また一緒にやろう」と言い合える関係を大切にしているのだ。

シ・ピ・エルでは、30年以上付き合い合っている顧客が多いのが自慢



デザイン案に指示を出す林社長

顧客はパートナー

シ・ピ・エルの歩み

年	事項
1947 昭和22	戦後の社会の混乱期中、啓蒙的博覧会の企画製作を業務とし、上島大三が初代社長として金沢市堅町に「株式会社シ・ピ・エル」を設立
1965 昭和40	事業所を金沢市彦三町に移転
1968 昭和43	事業拡張のため第2製作スタジオを野々市町に新築
1978 昭和53	社長に小作拓治就任。事業本部を野々市町とする
1986 昭和61	社長に南長樹就任。社名を「株式会社シ・ピ・エル」と改め、資本金を2000万円に増資
1989 平成元	旧松任市村井町に本社工場を新築移転
1993 平成5	資本金を5000万円に増資し、企画部門を旧松任市八束穂に移す
1999 平成11	各部門を本社に統合
2001 平成13	社長に小作拓史就任
2002 平成14	東京オフィス港区芝大門に開設
2006 平成18	創業60周年で、金沢市高岡町「金沢ビジネスプラザ南町」内に金沢オフィス開設
2007 平成19	東京オフィスを港区芝大門から港区浜松町に移転
2008 平成20	上海オフィス開設
2011 平成23	会長に小作拓史、社長に林美成(嘉成)就任。製作部門を独立させ株式会社ADファクトリー設立

だという。何年もの間、必ず仕事をもらえる顧客があり、この関係を最も重視している。会社が70年続いた根底には、この「つながり」があるのである。

これからの時代について林社長は、東京五輪で何かと受注が期待できるが、五輪が終わった後をどうするか考えることが大切だと思っている。かつて、経済界はリーマンショックや東日本大震災などで大きな影響を受けたが、シ・ピ・エルでは、ダメージとなるような落ち込みはみられなかった。広い分野に顧客がいるため、カバーし合えたのである。イベントが落ち込めば、内装でカバーするなど、総合的な業態の強みが発揮さ

れたのだ。

顧客が離れず

バブル景気のころは、仕事を選び好む会社もあったが、シ・ピ・エルでは、決して仕事を断らず受け続けた。手が回らず外注に出して、結果的に利益が圧縮されて苦しい時期もあったが、この時の対応のおかげで、顧客が離れずに、長く付き合い合ってくれる関係が続けられているという。顧客と支え合って築かれた70年の歴史を振り返りながら、林社長は、「顧客との関係を守りながら、次は100年を迎え、『老舗』と言われるようにしたい」と思いを巡らせている。



シ・ピ・エルが担当した展示ブースやサイン
左上から①株PFU様展示会ブース ②津田駒工業様展示会ブース ③日進工具様展示会ブース ④箱座様 箔品工房サイン工事(第29回いわが広告景観賞、石川県商工会議所連合会賞受賞)